

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

| | | |
|-------------------|------------|---------|
| 所属学部 学科 | 職位 | 氏 名 |
| 経営学部 地域ビジネス学科 | 准教授 | 大勝 志津穂 |
| 最終学歴 | 学 位 | 専門分野 |
| 中京大学大学院体育学研究科博士課程 | 博士 (体育) | スポーツ社会学 |

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

講義科目において、学生の興味・関心を高めるため、ICT を活用した授業を充実させる。

レポートや課題の評価を見える化するためルーブリックを作成し、学生自身に目標と到達点を把握させる。

演習活動では、座学だけではなく実際に現場に出て体験することを実施する。

(計画)

ICT を活用し、効果的な授業展開ができるよう情報収集と実践を行う。

レポートやプレゼンテーションに対応するルーブリックを作成する。

ドッジボール大会などのスポーツイベントの企画運営に携わる。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

健康・スポーツ実習、スポーツ社会学、地域とスポーツ、東邦プロジェクトB、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期)

スポーツマネジメント基礎、生涯スポーツ、東邦プロジェクトA、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

classroom を利用し、課題の提示、事前資料の配布を行い、学生の自主学習を促すとともに、欠席した学生にも資料が行き渡るようにした。

○作成した教科書・教材

各講義科目で使用するスライドの内容のアップデートを行い、最新の情報やデータを提示した。

○自己評価

classroom とこれまで活用してきた授業フォルダの両方を活用して、課題の提示、事前資料や小テストの回答を配布し、学生が自ら学ぶ意識で授業に臨むような仕掛けができたこと、教員自身が資料の印刷に時間をかけることがなくなったこと、無駄な資料を印刷することがなくなったことは評価できる。また、これらの取り組みで、印刷をしない学生も当日、スマートフォンで資料を確認することも可能となり、学生がそれぞれ学びやすい形で授業を受けられる環境を提供できたと考える。

また、今年度はこれまで演習で実施してきた野球教室を野球部に、TOHO 少年サッカー大会を男子サッカー部に移管したこと、マラソン大会が台風で中止になったこともあり、演習で多様な体験をする機会が少なかった。しかし、マラソン大会中止など、自然環境などで中止を判断しなければならないことを経験できたことは貴重な体験だったと考えている。

II 研究活動

○研究課題

スポーツによるネットワーク（ソーシャルキャピタル）構築の崩壊について

○目標・計画

（目標）

口頭発表 1 回以上、査読付論文 1 本以上、科研費あるいは外部資金の獲得

（計画）

7 月の日本スポーツとジェンダー学会あるいは 9 月の日本体育学会での口頭発表
博士論文の完成

○2012 年 4 月から 2020 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・ 手嶋慎介・大勝志津穂第 1 章「スポーツボランティアに関わる人材育成-参加者と運営側の 2 つの視点から」執筆担当『地域が求める人材』 愛知東邦大学地域創造研究所叢書 唯学書房 pp. 3-9. 2019 年 3 月
- ・ 川西正志・野川春夫編著改定第 4 版 生涯スポーツ実践論-生涯スポーツを学ぶ人たちに-12 章 スポーツクラブの現状と課題 [3] 全国的な総合型クラブの管理運営組織の現状 執筆担当. pp. 197-202. 2018 年 4 月 30 日
- ・ 日本スポーツとジェンダー学会編者「データでみる スポーツとジェンダー」3 生涯スポーツとジェンダー 2) ~4) スポーツ推進委員、(公財)日本体育協会公認スポーツ指導者、健康運動士・健康運動実践指導者、(公財)日本レクリエーション協会公認指導者、コラム 2、コラム 3 執筆担当. 八千代出版株式会社 p. 50、pp. 52-61. 2016 年 7 月 2 日
- ・ 大勝志津穂・長谷川望・藤重育子・高間佐知子・小柳津久美子・手嶋慎介・宮本佳範・河合晋「学内外における実践活動を通じた人材育成の可能性」第 6 章執筆担当 『学生の「力」をのばす大学教育-その試みと葛藤』 愛知東邦大学地域創造研究叢書 No. 22 唯学書房 pp. 52-62. 2014 年 11 月 10 日
- ・ 大勝志津穂・長谷川望・藤重育子・高間佐知子・小柳津久美子・手嶋慎介・宮本佳範・河合晋「大学における運動部活動を通じた人材育成-ライフスキル獲得に着目した取り組み」第 1 章執筆担当 『学生の「力」をのばす大学教育-その試みと葛藤』 愛知東邦大学地域創造研究叢書 No. 22 唯学書房 pp. 3-9 2014 年 11 月 10 日
- ・ 山羽教文・長ヶ原誠編著者「ジェロントロジー：身体活動 身体活動世代論」第 5 章 5-3 執筆担当 『健康スポーツ学概論-プロモーション、ジェロントロジー、コーチング-』 杏林書院 pp. 180-187 2013 年 6 月 20 日
- ・ 川西正志・野川春夫編著者「生涯スポーツとニュースポーツ [4] 地域でのスポーツ振興」第 11 章執筆担当 『[体育・スポーツ・健康科学テキストブックシリーズ] 改定第 3 版 生涯スポーツ実践論-生涯スポーツを学ぶ人たちに-』 市村出版 pp. 154-159 2012 年 10 月 17 日

（学術論文）

- ・ 大勝志津穂「成人の多様な運動・スポーツ実施促進条件に関する社会学的研究-実施経験のジェンダー差に着目して-」博士論文. 2019 年 12 月.
- ・ 大勝志津穂「うるぎトライアル RUN ボランティア参加者の意識調査-期待度と満足度の比較」2018 年 6 月 東邦学誌第 47 巻第 1 号 : pp. 137-144.
- ・ 大勝志津穂・來田享子「成人期以降の集団球技系種目実施者における過去の同一種目経験の影響

- 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査 2012」データの二次分析を中心に」2017年3月 生涯スポーツ学研究 13 (2) : pp43-54. (査読有)
- ・大勝志津穂「マラソンイベント開催による村の地域活性化に関する研究-うるぎトライアル RUN 参加者の支出による検討-」2017年6月 東邦学誌 46 (1) : pp. 39-48.
 - ・大勝志津穂「うるぎトライアル RUN 完走者の大会評価-大会満足度と自由記述のテキスト分析による検討-」2017年12月 東邦学誌 46 (2) : pp. 177-186.
 - ・大勝志津穂「運動・スポーツ種目の実施率の男女差について-実施率の時系列変化に着目して-」2015年3月 スポーツとジェンダー研究 13 : pp. 56-65. (査読有)
 - ・大勝志津穂「平成 26 年度スポーツライフ・データ 2014 (SSF 笹川スポーツ財団) -運動・スポーツ実施レベル別の実施状況-」2015年9月 体育の科学第 65 巻第 9 号
 - ・中山孝男・手嶋慎介・大勝志津穂・正岡元・小柳津久美子「2012 年度共同研究 : (研究課題) 「iPod touch/iPad を利用した教育手法の開発と研究」活動成果報告」2014年12月 東邦学誌第 43 号第 2 号 : pp. 127-139 (共著 : 執筆担当 pp. 130-131).
 - ・大勝志津穂「愛知県における成人女性サッカー選手のスポーツ経験種目に関する研究」2014年3月 スポーツとジェンダー研究 12 : pp. 31-46. (査読有)
 - ・大勝志津穂「プロジェクト実施活動を通じた人材育成の可能性-フットサルイベントの企画・運営の取り組み事例から」2013年12月 東邦学誌第 42 巻第 2 号 : pp. 173-181.
 - ・大勝志津穂「愛知県における社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討」2013年3月 スポーツとジェンダー研究 11 : pp. 43-56. (査読有)
- (学会発表)
- ・大勝志津穂「運動・スポーツ実施における同伴者の変化について-スポーツライフに関する調査 2008・2018 の二次分析-」2019年8月 日本生涯スポーツ学会第 21 回大会
 - ・大勝志津穂、藤山新、松宮智生、伊東佳那子、高峰修、建石真公子、田原淳子、來田享子「スポーツ団体におけるジェンダー・セクシュアリティに関わる課題への取り組みの現状」2019年6月 日本スポーツとジェンダー学会第 18 回大会
 - ・大勝志津穂・武長理栄「学校運動部活動の種目別活動実態と生徒の希望活動状況-12~21 歳のスポーツライフに関する調査 2017 の 2 次分析-」2018年8月 日本体育学会第 69 回大会
 - ・大勝志津穂・高峰修・伊東佳那子・建石真公子・田原淳子・藤山新・松宮智生・來田享子「性的マイノリティの人権に配慮したスポーツ指導環境の構築にむけた調査報告(1)」2018年7月 日本スポーツとジェンダー学会 第 17 回大会
 - ・大勝志津穂・來田享子「現在のスポーツ実施種目に影響する要因-過去のスポーツ経験に着目して-」2016年8月 日本体育学会第 67 回大会
 - ・大勝志津穂・來田享子「女性のサッカー人口増加の背景を探る」2015年8月 日本体育学会第 66 回大会
 - ・大勝志津穂・來田享子「成人男女の実施種目とスポーツ活動歴との関係-スポーツライフ・データ 2012 の二次分析より-」2014年8月 日本体育学会第 65 回大会
 - ・大勝志津穂「運動・スポーツ種目の実施率の男女差について-実施率の時系列変化に着目して」2014年6月 日本スポーツとジェンダー学会第 13 回大会
 - ・大勝志津穂・來田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手のスポーツ経験に関する研究」2013年8月 日本体育学会第 64 回大会
 - ・大勝志津穂「女性の生涯スポーツプロモーション-競技系種目について」2012年12月 東海体育学会シンポジウム

・ 大勝志津穂・ 來田享子 「愛知県における現役社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討：地域における生涯スポーツとしての女子サッカーの展望」2012年8月 日本体育学会第63回大会(特許)

(その他)

- ・ 來田享子・ 大勝志津穂・ 高峰修・ 建石真公子・ 田原淳子・ 藤山新・ 松宮智生・ 伊東佳那子 「体育・スポーツにおける多様な性のあり方ガイドライン」 発刊. 2020年2月. 公益財団法人日本スポーツ協会.
- ・ 大勝志津穂 「中学生・高校生の学校運動部活動の活動実態-ガイドライン制定後の変化-」 2019年12月. 子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2019-4 歳～21歳のスポーツライフに関する調査報告書-. pp. 40-46.
- ・ 大勝志津穂 「スポーツ指導に必要なLGBTの人々への配慮に関する調査研究-第2報-スポーツ団体のジェンダー課題等への取り組みについて」 2019年3月. 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I pp. 30-41.
- ・ 大勝志津穂・ 來田享子 「中央競技団体が取り組む女性のスポーツ振興戦略に関する基礎的研究」 2019年3月. 中京大学体育研究所紀要 33:pp. 83-88.
- ・ 大勝志津穂 「誰と運動やスポーツを実施しているのか？」 2018年12月. スポーツライフ・データ 2018-スポーツライフに関する調査報告書. pp. 32-37.
- ・ 大勝志津穂 「スポーツ指導に必要なLGBTの人々への配慮に関する調査研究-第1報-第7章「日体協指導者資格保有者の経験と課題～「スポーツ指導者に求められる指導上の配慮に関する調査について」～」 7-1 調査概要及び単純集計結果. 2018年3月. 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I.
- ・ 大勝志津穂 「中学校・高等学校の学校運動部活動の活動実態：種目別による比較」 2017年12月. 子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2017-調査報告書：pp. 43-48.
- ・ 大勝志津穂 「現在の実施種目からみる過去のスポーツ経験と今度の希望」 2016年12月. スポーツライフ・データ 2016-スポーツライフに関する調査報告書：pp30-34.
- ・ 大勝志津穂・ 來田享子 「現在のスポーツ実施種目に影響する要因-過去のスポーツ経験に着目して-」 2016年8月. 日本体育学会第67回大会体育社会学専門領域発表論文集 24号：pp. 72-77.
- ・ 大勝志津穂 「子どもの運動・スポーツ実施とジェンダー～高頻度(週7回以上)実施者の特徴～」 2015年12月 青少年のスポーツライフ・データ 2015-10代のスポーツライフに関する調査報告書：pp22-27.
- ・ 大勝志津穂・ 來田享子 「女性のサッカー人口増加の背景を探る」 2015年8月 日本体育学会第66回大会体育社会学専門領域発表論文集 23号：pp. 147-152.
- ・ 大勝志津穂・ 來田享子 「成人男女の実施種目とスポーツ活動歴との関係-スポーツライフ・データ 2012の二次分析より-」 2014年8月 日本体育学会第65回大会体育社会学専門領域発表論文集 22号：pp. 24-29.
- ・ 大勝志津穂・ 來田享子 「愛知県における現役社会人女子サッカー選手のスポーツ経験に関する研究」 2013年8月 日本体育学会第64回大会体育社会学専門領域発表論文集第21号：pp. 135-140.
- ・ 大勝志津穂・ 來田享子 「愛知県における現役社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討：地域における生涯スポーツとしての女子サッカーの展望」 2012年8月 日本体育学会第63回大会体育社会学専門領域発表論文集第20号：pp. 186-191.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- ・ 科学研究費助成 平成31年度(2019年度)基盤研究(C)「成人の多様な種目選択を可能にする

支援方策に関する研究」申請 不採用

- ・科学研究費助成 平成 30 年度（2018 年度）基盤研究（C）「スポーツ競技団体におけるジェンダー平等を実現するための取り組みに関する研究」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 29 年度（2017 年度）基盤研究（C）「スポーツにおける社会的弱者に対する中央競技団体が取り組む戦略に関する研究」申請 不採用
- ・2017 年度笹川スポーツ研究助成「大学資源を活用した地域スポーツクラブ設立に向けた実証研究—子ども達のスポーツ・プラットフォームづくりについて—」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 28 年度（2016 年度）基盤研究（C）「体力・運動能力の二極化現象に影響する「子どもの貧困」に関する研究」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 27 年度（2015 年度）若手研究（B）「スポーツにおける「ジェンダー平等推進と女性の地位向上」に向けた支援方策について」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 26 年度（2014 年度）若手研究（B）「生涯スポーツ社会のあり方を検討するための“草サッカー”の実態調査に関する研究」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 25 年度（2013 年度）若手研究（B）「競技団体が牽引する女性の生涯スポーツプロモーションに関する研究」申請 不採用
- ・公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ研究助成（2013 年度）「競技団体が行う女性の生涯スポーツプロモーションに関する研究」申請 不採用

○所属学会

日本体育学会体育社会学専門分科会、日本生涯スポーツ学会、日本スポーツ社会学会、日本スポーツとジェンダー学会、イベント学会

○自己評価

2019 年度は、口頭発表を 2 回行い、また、博士論文を完成させることができた。査読論文を提出できなかったが、次年度に向けて準備を進めることができたので、目標をある程度達成できたと言える。博士論文を完成させるにあたり、新たな研究テーマも見つけることができたので、次年度以降新たな研究テーマで外部資金の獲得を行い、取り組みを進めたいと考えている。

III 大学運営

○目標・計画

（目標）

学生委員として、課外活動の活性化を目指す。クラブ活動では、学生から応援されるチーム作りの支援及び、クラブによる地域貢献活動の充実を行い、学生会活動では、大学祭以外のイベント活性化の支援を行う。

経営学部執行部としては、2020 年に向けたカリキュラムの見直し、方向性について議論し検討する。

（計画）

本学の学生に応援されるチーム作りのための情報発信、認知度の向上に向けた取り組みを行う。各クラブの地域貢献活動の形作りを行う。

学生会メンバーとの月 1 回のミーティングを実施する。

○学内委員等

経営学部執行部、学生委員会委員、女子サッカー部顧問（監督、強化指定クラブ）

○自己評価

これまで演習で実施してきた野球教室や TOHO 少年サッカー大会を野球部、サッカー部に移管す

ることにより、各クラブが自分たちの強みを生かしながら、地域に貢献できる形を作れたのではないかと考えている。今後も、各部活動が、単に自分たちの競技力や競技成績を上げるだけでなく、地域の人たちに対して、どのようなことができるのかを考える機会を作っていきたいと思っている。

学生会の活動については、月1回のミーティングを実施することができ、彼らの自主的な活動を支援できたように思う。しかしながら、学生会そのものが多くの学生にとってあまり認知されていない現状があるため、学生会が学生のために何ができるのかを一緒に考えて、実行できるようにしていきたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

地域住民のためのスポーツ環境の提供

地域住民に向けた研究成果の情報発信

(計画)

愛知県サッカー協会、東尾張サッカー協会、名東区体育協会などと連携したスポーツ大会やスポーツ教室を開催する。

名古屋市の市民講座で講演を行う。

○学会活動等

日本体育学会体育社会学専門領域評議員、日本スポーツとジェンダー学会幹事、日本スポーツとジェンダー学会編集委員、笹川スポーツ財団研究員、中京大学先端共同研究機構体育研究所特任研究員、愛知東邦大学地域創造研究所所員、愛知県サッカー協会女子委員会総務委員

○地域連携・社会貢献等

- ・ 東海女子サッカーリーグ運営委員長として、東海女子サッカーリーグの運営を行った。
- ・ 愛知県サッカー協会総務委員として、協会主催のフェスティバルの管理運営業務を行なった。
- ・ 生涯学習センター平成31年度前期主催講座〈女性セミナー〉ワタシの心身 輝きUP大作戦〜これから社会で活躍する女性をめざして「スポーツとジェンダーを考える〜スポーツから見た、男女が共に活躍する社会〜」(2019年6月20日)
- ・ 第7回トーくん・ホーちゃん杯争奪ドッジボール大会 企画・運営 (2019年7月14日)
- ・ 名古屋グランパス連携企画 第6回ガールズサッカーフェスティバル開催 (2019年8月3日)
- ・ 第4回うるぎトライアルRUN 運営ボランティア (台風のため大会中止)
- ・ 公益財団法人日本スポーツ協会 スポーツ医・科学委員会「スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究」「体育・スポーツにおける多様な性のあり方」講習会講師 (2019年12月21日)
- ・ 第7回 TOHO 少年サッカー大会-8人制- 企画・運営 (2020年1月19日)
- ・ 九州共立×愛知東邦「地域を考える研究会」『スポーツを通じた地域連携』基調講演講師 (2020年2月20日)
- ・ 愛知県サッカー協会女子委員会、東尾張サッカー協会との連携事業 小学生女子のサッカースクール企画・運営 (年間12回開催)

○自己評価

今年度は名古屋市の生涯学習センターで市民講座を実施したり、(公財)日本スポーツ協会の指導者に対して講演会を実施したりして、研究成果を含めた情報を提供できたことは評価できる。また、スポーツ環境の支援として、東海女子サッカーリーグの運営委員長を務めたり、愛知県サッカ

一協会の総務委員を務めたりし、女子サッカーの活動支援を行うことができた。教員として取り組んだドッジボール大会やガールズサッカーフェスティバル、小学生女子のサッカースクールを成功裏に導けたことは、継続事業であり目新しさはないが評価できると考える。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・ 笹川スポーツ財団研究員として全国調査に関わり、報告書作成に携わった。特に、学校部活動の活動実施状況についてデータを分析し、トピックスとして執筆した。
- ・ 日本スポーツ協会の受託研究において、LGBT 等の性的マイノリティの人々のスポーツ環境について研究を行い、その成果として指導者に対して講習会を実施するとともに、ガイドラインを作成、配布を行った。

VI 総括

2019年度は、長年課題としてきた博士論文を完成させることができたことが最も評価できることである。2018年12月に博士論文を提出してから1年かけて修正や口頭試問を繰り返したため、学位取得が12月となったが、その過程は私にとって研究を進めていく上で大変意味のある時間となった。これからも自らの関心と社会状況を見ながら新たなテーマに取り組んでいきたいと思う。

学内業務においては、経営学部執行部として2021年度以降の課題について議論したり、教授会・学部会議で議事録をとったり、学部運営に携わることができた。学生委員会でも、学生会の運営サポートや課外活動の充実に向けた提案を行ったり、議論したりすることができた。また、社会活動については、女子サッカーを主として、地域社会のスポーツ環境の整備に携わったり、女子サッカースクールやフェスティバルを実施したりするなどして、実際にスポーツの場を提供した。野球教室やサッカー大会については、演習活動から部活動への社会貢献活動に転換をはかり、大学がもつ多様な資源を様々な方向から提供できる仕組みづくりを作った。これらのスポーツ実施の場を提供する社会活動は、継続することに意味があると考えている。大きな変革がなくても少しずつ改善を繰り返しながら長期間継続できるような仕組みづくりを作っていきたいと考えている。

以 上